

P-1.

**糖尿病性腎症における大量蛋白尿に
関連した病理組織学的特徴について**

(腎臓科)

○岡田知也, 長岡由女, 山田親行, 篠 朱美,
吉野麻紀, 日高宏実, 韓 明基, 松本 博,
中尾俊之

(内科学第三)

金澤真雄, 能登谷洋子

(病院病理部)

大谷方子, 清水 亨

【目的】 顕性糖尿病性腎症症例における蛋白尿に関する病理組織学的特徴を検討する。

【方法】 対象は尿蛋白量 0.5 g/日以上、腎生検にて糖尿病性腎症と診断された 57 名 (Ccr 25–131 ml/分)。腎生検所見からびまん性病変 (DI), 結節性病変 (NI), 細動脈硝子化 (Hya), 間質障害 (Int) の程度をスコア化した。対象を Ccr 60 ml/分以上で尿蛋白量 3 g/日以上の A 群 10 名, 3 g/日未満の B 群 10 名, および Ccr 60 ml/分未満で尿蛋白量 3 g/日以上の C 群 23 名, 3 g/日未満の D 群 14 名の 4 群に分け、各指標を比較した。

【結果】 DI は 4 群中 B 群が最も低く、AB 群間では A 群が高値の傾向を認め ($p = 0.05$)、CD 群間では有意差を認めなかった。結節性病変を有する症例の割合、NI は 4 群間で有意差を認めなかった。メサンギウム融解を認める糸球体の割合にも 4 群間で有意差を認めなかった。Hya は 4 群中 A 群が最も低いが AB, CD の各 2 群間では有意差を認めなかった。Int は AB 群間では有意差を認めなかつたが、C 群は D 群に比し高い傾向を認めた ($p < 0.05$)。

【結論】 顕性糖尿病性腎症において、大量蛋白尿の症例では間質病変が進行している傾向があり、腎機能低下の進行に関与している可能性が考えられる。